

中世の巨大用水路－女堀－

●女堀の全体像●

おんなぼり
女堀は、前橋市上泉町の桃ノ木川から取水し、伊勢崎市田部井町（西国定）までの約13kmに及ぶ大規模な灌漑用水路です。12世紀中頃（中世初期）に造られ、途中に分水のない用水路であると考えられています。

全体の落差が小さく、赤城山南麓の標高約95mの等高線に沿うことから、緩やかに流れる緩勾配の用水路として測量、設計、掘削が計画的になされたと考えられます。

*諸説あります。



■赤城山南麓を横断する女堀（昭和50年代）



■史跡女堀赤堀地区（中央は花しょうぶが植栽された上幅28mの女堀、左は女堀を掘削した排土）

●未完成の水路●

発掘調査の結果、女堀は掘削工事が完了しておらず、また用水も通水した痕跡がないことから未完成であることがわかりました。なぜ完成しなかったのか記録には残されていませんが、測量などの技術的なミスや、戦乱による淵名氏の没落が原因ではないかと指摘されています。

なぜ女堀？

女堀や女堰など「女」の付く用水路は、関東や長野県に多く確認されます。その名称について、「姫（おうな）堀」が女堀に転じたとする説や、河川を「男」、河川から取水した用水路を「女」とする考え方などがあります。

●誰が開削したのか●

女堀は、受益地となる淵名荘の淵名氏が開削者であると考えられます。12世紀中頃に掘削された女堀は、全国的に荘園開発が進む中で水田の大規模灌漑用水事業として、浅間Bテフラなどで疲弊した地域再開発の要素も含みながら、その計画が用意されたのでしょうか。



■発掘調査された女堀（前橋市飯土井町）